鎌倉・九条の会ニュース

第３３号　２０２５年４月　発行

鎌倉・九条の会
TEL:0467-24-6596
FAX:0467-60-5410
0467-24-6577
Email:kamakura9jo@gmail.com
HP:http://kamakura9-jo.net
FB:https://www.facebook.com/groups/kamakura9jo

鎌倉・九条の会
発足20周年

学習講演会

2025年　1月26日（日）
1：００～3:30

鎌倉生涯学習センター
第5集会室

どうなのどうする食料！

原田　俊二

昨年の夏、スーパーの棚からコメが消えた。農家の平均年齢は七〇歳に近づき、後継者不足が言われて久しい。食糧自給率は四〇％を切っている。なぜこんなことになってしまったのか？わたしたちは、生産の現場の声をききながら勉強しようと考え、この一月二六日、原田俊二氏を講師に迎えて学習講演会を開催した。

原田氏は山形県川西町の出身。明治大学卒業後、東京で教職に就いたが、子どもの誕生をきっかけに、安全で健康な食べ物について考え、故郷に戻り有機農業を始めた。

川西町町議を経て、昨春まで五期川西町町長を務めた。

原田氏は町や国の資料を示しながら、作況指数とは何か、コメの値段はどのように決まるのか、備蓄米とは何か、を丁寧に説明された。そして高齢化した農村の現状、課題を示された。

農家が家庭を持ち、子どもを育て、地域を守りながら普通に生活できる、そんなあたりまえの社会にすることが今わたしたち国民に問われている。

昨年のコメ不足はなぜ起きたのか

皆さん、こんにちは。原田俊二と申します。

私は一九八三年、昭和五八年に東京から田舎に戻りました。子どものために安全なものを作りたい。そして自立した生き方をしていきたいと考えたのです。

今日お配りした資料は国とか町の情報を中心に作りました。

まず最初に去年の九月・十月、コメがスーパーから消えたということが大きな話題になりました。その後、今もコメの値段が上がり続けています。どうしてなんだろうということになるわけです。

コメ騒動というのを私も経験したのが九三年ですね。平成五年の大冷害でした。これは本当に深刻な状況でした。作況が七四、これ全国の作況です。作況、というのは収穫量の目安のことで、一〇〇が平年作です。

収穫量は七八〇万トンでした。その当時一〇〇〇万トンの生産収量がベースになっていて、七八〇万トンしか穫れなかった。だから二五〇万トンも足りないということで、緊急に外国からコメを輸入して、乗り切ったのでした。

相対取引というのですが、この平成五年、業者間の取引額が一俵（六〇キロ）二万三六〇七円でした。

去年、令和六年産のコメの相対取引額は二万三七一五円です。九月から飛び抜けて高くなり、十二月に二万四〇〇〇円、平均すると二万三七一五円。これは記録に残っている平成五年以上の最高の価格になった。

相対取引というのは、集荷業者さんのコメを卸のところに売る、農協が〇〇卸に売ると。その〇〇卸さんは精米したりしながらスーパー等に並べるわけです。この一〇年ほど、価格は高くても一万六〇〇〇円ぐらいでした。

（表を見ると）ちょうど令和六年は六月、七月、八月とだんだん上がっていったことがよく分かります。

そして新米が出てきた九月には二万二七〇〇円から最後には二万四〇〇〇円まで上がりました。どれだけ需給がひっ迫したかが、ここからは読み取れます。

しかし令和六年の作況は、一〇一なんです。全国のコメの生産量は、予定どおり生産されたと国は見ています。ですから、八月ごろから五年産が足りなくなって高くなったけれども、六年産が入れば通常ベースに戻るのではないかというのが、国の見立てでした。

なぜそうならなかったのか。国の二〇二四年六月の民間在庫量一七七万トンの予想に対して一五三万トンまで下がってしまった。これは本当に過去最低レベルです。

なぜか。その前の年、令和五年産のコメの収量減少や品質低下が大きな要因です。

令和五年は、干ばつ・猛暑、さらにはフェーン現象による四〇度近い急な熱波にコメは大きなダメージを受けました。

令和五年産も全国の作況は一〇一でした。そんなに穫れなかったわけじゃないのですがコメどころでの収量や質が悪かった。

酒米を例にとると、粒厚一・九五ミリの網ですくって残ったものが特別なコメで、これを五〇％削り、大吟醸・吟醸を作るのですが、それができなかった。

粒が小さいので一・九ミリぐらいの網目でもどんどん落ちてしまったという年が令和五年産です。山形県の作況は一〇〇を超えていたけど、心白粒や胴割粒などコメの質が悪かったのです。

もう一つは着色粒といってカメムシがかじったりします。普通は、あめ色の光沢のあるコメが質的にもいい、そういういいコメが穫れなかった。ですから一〇一という数字ではあるものの、実際には目減りしたのです。

作況指数と米の値段

国の作況　指数の出し方も問題なんです。

国は農家に委託して坪刈りといって、田んぼ一反＝一〇アールの二隅と真ん中を合わせて一坪くらい刈って、それを脱穀、籾摺りをして、一・七ミリの網でとります。上に残ったのが収量になる。でも一・七ミリなんかで出荷したら一等米には通らない。一等米でなければ収入が低く、やっていけないので、農家のみなさんは一・九ミリの網を通します。一・九五ミリで、更にレベルの高いコメを出そうという人もいますけども、基本的には一・九ミリです。一・七ミリで通すより収量が三〇キロぐらい減少します。

ですから国が作況一〇〇と言っても、実際は一〇アールで三〇キロくらい減ります。

川西町はコメどころで、大変コメ作りには適したところです。一〇アールあたり六六〇キロぐらい生産可能な土地柄です。

＊全国平均・昨年は約五四〇キロ

それから三〇キロ減るということになれば手取りが減ることになりますので、作況一〇一ということにごまかされないでほしいです。販売するコメ自体が減っているというのが、令和五年でした。

そのことが実際に反映しているのが、ここにあります二〇二四年六月の民間在庫量です。一七七万トンという数字が出ていますが、これは予想でした。

令和五年の作付けをして、その収量から見て去年の六月に民間在庫は一七七万トンになるだろうと予想をたてて作付けをしました。

でも実際には一五三万トンしかなかった。この数字を見て民間の卸の皆さんはコメが足りないんじゃないかと考え始めます。すると、じわじわと値が上がり始めたのでした。

次にJAおきたまのこの二〇年間の平均の単価（農家からの買い付け概算金）が「コシヒカリ」で一俵（六〇キロ）一万一九六〇円です。「はえぬき」で一万一一九五円。「つや姫」は平成二二年から出てきましたが、一俵あたり一万四六二九円、これはご飯茶碗一杯分で一二円から一六円です。

ご飯茶碗一杯約一三円が農家の手取りでした。ですからこの表をよく見ると分かりますが、例えば平成二六年の九〇〇〇円（一杯一〇円以下）とかですね、八〇〇〇円とか。令和三年も一万円切っています。この辺りはコロナで飲食店の消費が減り、インバウンドがスパッと止まってしまった時期です。在庫を抱えている米屋さんからすると高く買えないということで、どんと値が下がった。

八〇〇〇円、九〇〇〇円では生産費を割り込んでしまいます。

農家はこの二〇年間ずっと苦労してきました。

今JAは一万五九〇〇円、一万五七〇〇円で「はえぬき」「つや姫」の値段を出しています。でもこれではJAにコメが集まらなくなりました。買付け業者がいっぱい来て、ここから二〇〇〇円足しますよ、と言って、一万八〇〇〇円とか一万九〇〇〇円で買いつける。

農協に出荷した人たちはいますけれども、それ以外に買付け業者が入って、「はえぬき」に三万円という数字も出ていました。

三万円でも譲ってほしいと。それだけ過熱しているのが現状です。ご飯一杯分にすると、六五グラムですから約四五円です。

高いと言われると、うーん…そうですか？なかなかその先が言いづらいですが。

川西町のスーパーのコメの値段を見てきました。消費税込みで「つや姫」が五キロで四一五八円、「雪若丸」で三八三四円でした。農家から見ると、これはご飯一膳にすると一五円ぐらいの値で出荷している米です。それがスーパーに並ぶと五〇円になる。結局農家の手取りはそんなにばかに増えているわけじゃなくて、中間のところで動いているのが現状ではないかと思います。

備蓄米は計画ベースからすると一〇〇万トンです。年二〇万トン買付けします。五年間備蓄して、六年目にコメを加工用やエサにまわして、主食用にしないで備蓄をしてきました。例えば大冷害になったりとか、戦争などの不測の事態が発生した場合には主食用に出すというものです。

食管法から食糧法＝市場原理へ

二〇年前、食管法から食糧法に変わりました。民間主導でやるんだと。民間主導でやる、ということは統制価格ではないので、上がったり、急に下がったりします。先ほど紹介したコロナの時期のように、生産者米価九〇〇〇円の年があるわけです。それも市場原理だから、と生産者に言ってきたのに、今度は市場を冷ますために急に備蓄米を出すという。

一般消費者からすれば当然だとなるかもしれませんが、生産者側からすれば、市場原理の中、長年赤字でも生産を続けてきたので、不満が出るのではないかと思います。自分たちが今まで苦労してきたことはどうなんだ、と。

生産者は今まで生産費を賄えませんでした。出荷額が一万五〇〇〇円を超えればようやく賄えるんです。

十二月二〇日過ぎの朝日新聞にコメ農家の手取りは時給一〇円という記事が出ました。

これは二〇二〇年の生産費調査だと思いますけども、農家一経営体当たりの売上と言いますか、販売収入が三七八万円でした。そこから、農業経費、資材費などの経費を除くと残ったのが一万円。生産するのに労働時間が一〇〇〇時間。時給一〇円になるという計算です。

以前、生活保護の給付費は消費者米価が一つの査定数値になっていました。コメが食べられなければ、生きていけないわけですから。消費者米価が上がれば生活保護費も上がる。

田中角栄首相の頃にはどんどんどん米価が上がりました。それで農家の皆さんも大変喜んだ。毎年一〇〇〇円ぐらいずつ上がったんですね。

生産者米価が上がれば農家は消費をする。家を建てるとか、車を買うとか、機械を更新するとか。それで結局回り回って、税金で国に返ってくる、という時代がありました。

米価が上がるということはベースアップ、人件費も上がる。生活保護費も上がる。コメの価格というのが社会の一つのものさしになっていたのではないか。先ほどの時給一〇円の記事をめぐって、わたしたちはこんな議論をしました。

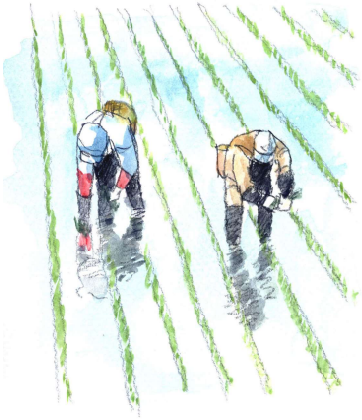
この二〇年間米価は上がらなかった。人件費が上がらないのと同じです。今、勤労者のベースアップがいわれていますから、コメの値段もリンクして値上げしていただかないと農業者がいなくなってしまう。

米価が一万一〇〇〇円から一万五〇〇〇円になっても生産者は生産費がやっと賄えるようになったぐらいなので、消費者のみなさんにはそこを理解していただきたいと思います。

コメを作る量はどう決めているのか

在庫が増えると米価が下がってしまうので、ちょうどよく回るぐらいの生産量にしましょうというのが、「需要に応じた生産」という今のコメ政策です。

生産量は在庫で決めます。在庫二〇〇万トンがベースでした。



そうすると、令和三年、四年は在庫が二〇〇万トンをこえたのでコメがだぶつくというメッセージになるんです。「たぶん売れ残る」ということで農協は概算金を下げます。

令和六年の在庫見通しは一七七万トンということで二〇〇万トンまで生産量を確保しようとしたのですが、実際には前年と同じぐらいの量しか作付けできませんでした。

一回荒れた田んぼを水田に戻すのが現実的じゃないんです。名称は水田でも野菜や果実など他の用途で活用していますので。水田を畑地化するには排水をよくしなきゃいけない。水田にするには水を溜めなきゃいけない。この矛盾です。

畑地化しますと、一年目は水はけが悪いので水が溜まります。すると大豆や野菜の収穫がよくない。それが二、三年して生産が安定してきたところで畑から田んぼに戻そうとすると水が溜まらない。その繰り返しです。

ですから、コメが急に足りなくなったから作付けを増やしましょうと言っても現実には簡単に増えません。

規模拡大、法人化では解決しない

もう一つは、規模拡大や法人化すればいいんじゃないかという話です。五ヘクタールやって収量が安定していた人に、隣の人が辞めたから二倍のコメを作ってくれと言っても手が回らなくなってしまい、規模拡大したことで収量が全体的に落ちてしまっている。例えば、水路整備のために今までは何人かでやってきたことを、ひとりだけで何百メートルもの水路の管理ができるのかという問題です。規模拡大で農家の負担が大きくなっている。

実際に七〇ヘクタール法人経営されている新潟の農家の話では、国は面積を倍にすれば収入は倍になるというけれども、そう簡単にはいかない。適正規模があるし、農地が点在していて水回りを見るだけでも半日かかってしまう。需要と供給のバランスをとって、安定した米価にしていきましょうという国の政策ですが、現実には米不足の原因になっているのではないでしょうか。

コメの生産量を減らすための生産調整政策とは

一〇アールあたりのコメの売り上げは令和四年度で一一万八〇〇〇円。五年度は一三万円。そこから経費を引くと、所得は四年度に一万八〇〇〇円、五年度二万九〇〇〇円です。

これをモデルにして、コメ作りを休んでもそのくらいの所得を確保しましょうというのが生産調整の支援策です。

例えば大豆を作った時、大豆の売り上げ三万円。畑地化しただけで三万一〇〇〇円の交付金、プラス、戦略作物として三万五〇〇〇円の交付金など、一〇万六〇〇〇円の売り上げになります。経費を引くと五万五〇〇〇円ですからコメより大豆の方が所得は高い。もちろん、品質がよければ交付金を足しますよ、という二段構えです。

こういう形の交付金で所得を確保して、コメを作るよりも休んだ方がいいというのが国の施策です。

川西町の去年の作付けは目標一万五一四一トン、二四三〇ヘクタールです。配分率は五五パーセントがコメの作付け。四五パーセントがほかの作物です。実績は二四〇六ヘクタールですので、実際には需要に応じた生産面積に作付けできていません。

令和六年月、国から示された民間在庫量は去年の同じ時期より四三万トン減っています。ですからコメが足りないという状況はもう少し続くと思います。

今年・令和七年の八月、早場米が出て普通の生産であれば何とか落ち着くと思いますが、米価が急上昇していることから江藤大臣が備蓄米を出そうとしている。集荷が不足しているＪＡからも強く要望が出ているんです。

あまり高くなりすぎると消費者の買い控えが起きることや、今年以降の卸との契約確保のため、コメの安定供給も図りたいと考えている。

生産者は生き残れるのか

最後に、生産者が生き残れるかということですが、私も大変暗い思いです。生産現場は団塊の世代、後期高齢者が担っています。

今は機械化が進んでいますから、フォークリフトでほとんど重いものを持つことなく、コンバインもトラクターもエアコン付きです。

ただ、値段が高いんです。トラクターが一千万円。コンバインが二千万円です。コンバインの稼働時間はせいぜい二週間ぐらい。他の三〇〇日以上は眠っているんです。

これが生産費を押し上げているわけです。

国の施策は、これからの担い手に集中しましょうということになっていまして、若い人たちに対しては手厚く補助政策や保護政策をしていますが、七〇代の人たちは、コンバインが壊れたり、トラクターが動かなくなったら辞めるしかないと本音で言っている。今まで一〇町歩頑張って作付けしてきた人が急に体調を崩し、もうできないと受け手を探す状況です。

平均年齢は七〇近いです。

あと五年すると、一番多い団塊の世代は八〇歳になります。

食料を守るのは誰か、農家の皆さんは最後まで一生涯頑張ろうと思っています。

以前は国が米作をしっかり買い支えていた。民主党政権の時に個別所得補償として、穫れる穫れないに関わらず、水田に一〇アールあたり一万五〇〇〇円出すことになり、農家は大変喜んだ。しかし、一俵当たり一〇〇〇円が農家に入るなら、一万二〇〇〇円ではなく一万一〇〇〇円に、とＪＡの買付けがその分単価を値切った。

こんなことでは生産者は本当に報われない。

生産者がしっかり子どもを育て、家庭を持ち、地域を守っていける、農村社会を継続できるコメの値段になるべきで、国は社会政策としてやることが大事です。

コメを作らないために生産調整で約三〇〇〇億円、国で使っています。さらに、圃場整備といって農地が今まで三〇アールだったのが一ヘクタールや二ヘクタールになるので、作業がしやすくなる。この整備費に約六〇〇〇億円です。このお金、農家に行っていると思われていますが、ほとんどが工事費、公共事業で建設業、土木業者に行っています。もう少し合理的な金の使い方はないものか。

農村環境を守るために何が必要か、みんなで考えていくことが大事です。

みなさま方にはおコメを買って、農業を支えてほしい、生産者と消費者がウインウインの関係になってほしいというのが私の願いです。

井上ひさし先生は川西町の出身です。亡くなられた四月九日を中心に、先生を検証する吉里吉里忌を開催して今年一一回目を迎えます。

質疑応答

（原田） 先ほど話し足りなかったことを一つ。一月五日付山形新聞に載ったＪＡ広告を持ってきたので見てください。コメ茶碗一杯三九円、とあります。今はそれより上がっていますが、それでも五〇円なんです。みなさんに理解をして支えていただければ、と思います。

（質問） 人口が減り、コメの消費量、必要量も下がります。日本は一番最初に餓死する国という本もある。後継者とうまくつながっていくのか、実感としてどうなのか教えてください。

(原田)一次産業がこれからどうなっていくのか、農業だけの問題ではありません。一二月に川西町と友好関係にある岩手県の大槌町を訪れました。大槌の吉里吉里地区は江戸時代から鮭がよく捕れて、新巻などの保存食にして江戸に出荷する大産地だった。そこの魚屋さんと話をしたら、今年は鮭が一四匹あがった。一一匹は小学校の新巻体験作りに持って行って、うちの店には三匹しか残らない。

去年は秋刀魚も獲れなかった。道の駅でいくらの醤油漬けがあったのでラベルを見てみたらこれは山形県産だった。三陸に鮭が近づかないので日本海から鮭を持ってきて作っている。一次産業の中でも水産業が特に厳しい。従来の魚が寄って来ない。三陸に伊勢海老やハワイの魚が来るようになっているという異常気象です。

もう一つ、私の心配は山が荒れていることです。川西の山はほとんどが薪を取ったり、炭を焼く共有地、入会地です。その山を民間の業者がどんどん買い集めている。名目はバイオマス発電で本社は東京にある。

異常な買い占め方です。山に行く人たちが減り、所有者が代替わりしている。一〇アール一万円とか二束三文で山が買い占められている。海外の地主が生まれるかもしれない。

県にも伝えたが歯止めをかけないと自分達の環境は守れないと思っています。

要は今、山を活用する術がなくなっている。昔は松茸の産地で、すごくいい松茸やしめじが採れるきのこの山だったのが荒れて採れなくなっている。熊が出るとか猿に追っかけられるとかで、山に入らなくなっていて、人の営みが本当に後退している。

農家は、生産費を賄えない分、年金をつぎ込んで機械を買っているのが現実です。あるいは兼業で働いて、生活防衛している。そういう状態で後継者を育てるのは大変厳しい。

朝日新聞の投書に去年一一月一五日、千葉県七七歳男性が持続可能な米作りのためにと投書された。

【最近の米価高騰に驚かれる方も多い。私たち農家は一筋の希望を見出しています。その理由は息子が七年前に新規就農した。米作りにはコンバインや乾燥機の購入等、多額の初期投資や毎年の経費が必要です。息子は妻と中学生の娘と暮らしていますが、生活は厳しく、教育費の負担も大きい。息子の妻も外で働きながら家計を支えています。全国的に農業の後継者が不足しており、息子も地域の田んぼを守るため、二ヘクタールから一〇ヘクタールに拡大したが、設備投資の増加と借金の増大で収益がそれほど増えないのが現実です。

息子の厳しい現実を見て、私は若者に農業を勧める自信が持てない。

地域の農業全体が存続の危機に直面しています。お米は日本の主食であり、農業を守ることは食糧安全保障にも直結しています。消費者のご理解と国からの支援が不可欠です。

支援がなければ持続可能な農業が困難です。お米の価格についてどうかご理解いただき、おいしく食べ続けていただけるよう、暖かいご支援をお願い申しあげます】

これはぜひ皆さんに読んでいただきたい。これから先、今のままではスーパーにコメは並ばなくなると危惧しています。

五年先が分からない。今年の作付けはするが、作付けした人が来年出来るのか。一〇町歩、一五町歩していた人が病に倒れた。急にやれなくなって、一〇町歩、一五町歩を誰が引き受けるのか、農業委員の皆さんは担い手探しに苦労しています。

ある四〇代の生産者が今までコメを五ヘクタールやって、さらに牛の繁殖で子牛を育ててきた。その彼が、近所の生産者がコメを作れなくなったので引き受けてくれと頼まれた。

田んぼの面積は倍になった今、彼は病気じゃないかと思うぐらい、ガリガリに痩せてしまった。山地なので水路の維持だけでなく、田んぼの法面が平地の三倍以上で、その草刈りもある。もう少しゆとりがあって、希望が持てるようにならないのか。彼がくじけないためにはどうしたらいいかということです。

僕が言っているのは「無理するな」。病気になってもうできないって言われるのが一番辛い。若いから、担い手だからと地域の中で苦労を押し付けるのはいかがなものかと思っています。

次の担い手を確保するために、私が政策として始めたのは、女性農業者を増やすことです。まだどうしても家の代表は男性ということになっているが、例えば、加工とか、園芸が得意だとか、自分が得意な分野でチャレンジしたい方に、男性とは違う町独自の認定制度、女性農業者の支援制度を作りました。男性も女性も能力を発揮し、生活ができる条件を作りたいと考えました。

今年のコメはまだ大丈夫だと思いますが来年、再来年はどうなるか。綱渡りの状態が続くと思います。

(質問)政府の備蓄米を今年出す、とニュースで見ましたが、市場に出た時、古古米とかになるのですか。

(原田)今、農水省とＪＡでやり取りしているのは、最新の「古米」だと思います。多分六年産。

(質問)備蓄米を出した時に、価格は下がるのですか。

(原田)それを国は期待していると思います。

(質問)日本人の主食はおコメ。小麦粉が値上がりしてパンが高くなったが、嗜好品だと思います。生活が困窮している方にとっておコメが一番安いから、おコメを買って暮らす基本があり、政府も根底はコメだと考えていると思う。だからコメ自体は高くても当たり前のことと私は思います。ただ、私の息子は今、岩手で農業をやっているので…。

○原田俊二　ああ、素晴らしい！

(質問)息子は岩手の山間部で山ブドウの農園の傍ら、大きくはない田んぼもやっていますが、自分たちの食べる分だけの収穫をしているんです。周りの農家も年寄りばかりで、年金で生活をしているそうです。

(原田)国民年金ね。

(質問)年金でどうやって生活しているのかというと、野菜を作って道の駅で売っていて、これが年金以外の収入源になっている。こんな状況だから、農家を継ぐ人はおらず、みんな都会に働きに行っています。

　政府が農業を支えないと本当に大変なことになると思う。また、おコメが高くなると買えない人が出てくるので政府の備蓄米の放出は早くやってほしい。

(原田)備蓄米の放出については、生産者も理解はしています。でも、今はやっぱりコメが投機対象になっているのではと思います。出し惜しみです。

　コメを抱えている人が、もう少し価格が上がるのを待っているということがあるのではないかと。

(質問)備蓄米は古いコメではないということですね。

(原田)そうです。でも、古いコメもおいしいですよ。今は低温倉庫でしっかり管理していますので。精米してからは早く食べたほうがいい。ペットボトルに入れて、冷蔵庫に入れておけば日持ちします。

(質問)私は、山形の知人から安くおコメを買っています。業者を通すのと自主的に販売するのとでは利益の差はあるのですか。

(原田)農家の人は太っ腹ですから、農協に出した値段でいいよと言ってくれるのではないですか。

(質問)最近、その農家の方が箱に詰めたり、伝票を切ったりがしんどくなってきたと言っています。

(原田)そうですね。年を重ねてもその地域で農業を続けられるような社会的な仕組みづくりが大事だと思います。

(質問)私は、長年生活クラブ生協からおコメを買っています。生活クラブでは、おコメを買うたびにわずかですが値段にプラスアルファを払って、それを基金として積み立てています。

(原田)庄内の遊佐ですね。生活クラブと生産者の関係はとても立派です。それは提携のモデルともいえるものだと思います。

(質問)私たちが農家に対して、年間これだけ買うからこの分を作付けしてくださいということができれば、中間マージンも取られずに農家に直接お金が入るシステムができるのではないか。

(原田)私も有機農業を始めたとき、収穫したコメの売る場所がなく苦労しました。生産者が消費者と直接つながってやり取りができるシステムがやがて有機農業を支える有力な手段となりました。

　生産者を支える消費者の存在がとても重要だと思います。昨年、コメがないというときにネットでコメを売る人が出てきて、それを注文する人が随分いました。

　しかし、コメがスーパーに並び始めた途端にキャンセルが続出しました。生産者と消費者を強固に結びつけるには、にわか育ちではなく、長い期間による信頼関係づくりがいかに大切かということがよくわかりました。

要約・文章化の責任は
鎌倉・九条の会にあります。

アンケートのご協力ありがとうございます いくつかご紹介します

★①アメリカはトランプになり、今後の種と肥料の輸入はどのようになっていくのでしょうか。
②日本の自給率では三〇〇〇万人しか食べられないと。
③五〇円／茶碗一杯

★本日は貴重なお話をありがとうございました。農業という第一次産業、人間の一番必要な仕事について何もよくわかっていなかったことを思い知らされました。
　農業を仕事にするにあたり、経済的な面はもちろんのこと、誇りと希望をどのように持つのか、難しいながら大切な課題であると考えます。
　また、お話をお伺いできれば幸いです。

★今日は貴重なお話をしていただきありがとうございました。生産者を賄えない「米」農家時給「一〇円」、お茶碗一杯「三九円」。よく味わってご飯を感謝しながら頂きます

★・国の政策がないために生産者と消費者が分断されている気がする。
・農村は、食糧問題であり、環境問題であり、都会を守っている。
・井上さんが『吉里吉里人』を書いたのは、日本国憲法だけでなく、農業を中心とした生活を守ることである。

★行政に携わった立場と、農業実務者としての話がよくわかりました。お米が高いと申し上げたのは、地元での販売もこちらと同じことに驚き「高い」と申しました。
　現在、山形の知人からお米を購入していますが、市販よりは安くいただいています。現在の米価を維持してしまえば、消費者も慣れていくのではないでしょうか。
　何かが起きないとしっかり考えない風潮に今回は気づかされたことと思います。生活者大学校、初期、井上先生が一人七〇㎏を年に消費と聞いたことを覚えています。現在はさらに減っている現状。
　何を食べるかは個人の自由とかを言っている状況ではないと思います。自給率を挙げることを声高にお願いしたいと思います。　特に行政が音頭を取るべきと思います。

★米生産の将来は暗いと思います。米農家がもっと減るのは確実。米を食べる（ただし家で米といで炊いて食べる）人も減っていくと思います。
　昨年、秋の米がないと騒がれていた頃も米を買わず買ったおにぎり、パン、パスタ、弁当、ピザなどを食べ、米のことを気にしていませんでした。
　米を買いに行ったのは一二月でした。
　米屋さんも減っていますネ。鎌倉の米屋さんも減っています。知人は米屋さんですが、やはり重いものを扱うので腰を悪くしました。米屋さんも大変です。
　米をといで炊くのが面倒です。すみません。米に限らず、農業する人に希望の持てる政策を国や県はやってほしいです。
　農業の衰退は国の衰退です。

★農業問題についてお話をうかがう機会が少ないので、今日はよい機会をありがとうございました。
　レジメ五にある、地域主権の確立、経済性優先から持続可能な社会へ、自己責任や弱者切り捨てからの脱却、第一次産業の再生、誰もが食の豊かさを享受できる社会、すべて大事なこと。実現させなくてはと思います。

でも、どうしたらいいのか。何かひとつずつでも進めるしかないのですが、先行きがよくわからず不安です。
　米に限らず適正価格を消費者も考えなくてはいけないと思いました

★大変難しい内容でしたが逆にこのようなことをしっかり理解している方が農業の現場におられることが重要だということを理解いたしました。
　私自身を含めて、参加者自身も高齢（かつ大半が女性）であることが気にかかりました。「九条の会」を含めて、若い世代をしっかりと巻き込んでいく工夫を考えてみたいと感じました。
　例えば、今回のフジテレビの問題は、海外の機関投資家という縦割りの枠組みにいなかった「部外者」の指摘で大きく動き始めました。
　日本の米作りのコミュニティーの外の方をうまく巻き込むことで直接の対話が少なかった生産者と消費者、国内生産者と国外生産者、生産者と研究者や企業などをステイクホルダーにして、大きなうねりが起こることを期待します。
（今回は地方の生産者と都会の消費者という新鮮な出会いが貴重な機会となりました）